なつている竹島の問題をとりあげているのが特に注意をひく。この研究は外務省の川上健三氏等に引きつがれ、わが国の領土権主張の有力な根拠となつているのである。なお日ソ間の千島帰属の問題にも著者の提供した資料が大いに役立つていると聞く。骨董扱いもされかねない古地図が今日の切実な問題と現実に結びついていることを示す生きた例の一つだといえよう。

いずれにしてもこの書によつて、少くとも日本全国に関する限り、夥しい貴重な資料がみごとに整理されて研究者たちの前に提示されたのである。その意味でこの労作は日本地図学史上に朽ちることのない記念碑となるだろう。未墾の沃野はようやく美田と化した。その実りをいかに収穫するかということは、むしろこの書に啓発される読者に与えられた課題であろう。その意味からも、著者の構想される未発表の論著が引きつづき刊行される日を待望してやまない。

なお本書一一〇頁に地理学史研究第一輯とあるのは人文地理七ノ六の誤である。これは私自身に関係あることなので、著者にお詫びかたがた訂正させていただく。（B5、二一六頁、折込図版二葉、アート図版七二頁、七〇〇円、河出書房）

——室賀信夫——

京大西洋史研究室編
傭兵制度の歴史的研究

敗戦後いち早く、新憲法に基づく平和体制を実施したにも拘らず、現在我が国は、再軍備体制を強要せしめられている。資本主義国アメリカの事実上の従属国として、我が国自体が他ならぬその前衛なのである。これをも傭兵化の一現象というも、決して過言ではないであろう。かかる祖国の現状を直視する時、我々歴史研究に携わる者は、この冷厳なる事実に、眼を覆う事は出来ない。所謂転換期の渦中にあつて、一国傭兵化の事実を深く省察する時、それは根深き歴史必然性を択つているかに思われる。いま京都大学西洋史研究室の方々が、本書を編纂されたことは、この意味からもまことに、意義深きことといわねばならない。事実この書物の「あとがき」に、執筆者代表者も、「いろいろと論じあつているうちに、社会の大きな変化と傭兵制度の成立との間に、必然的な関係があるのではないかということに気がついた」とされ、この研究開始の問題関心も、はつきりうたつていられる。されば研究の基本方向は、「(1)中世末期から近世初期における傭兵制度に研究対象を限定すること、(2)純粋な軍事史的考察ではなく、傭兵制度の成立の社会経済的基盤、政治権力との結びつきという視野から、」（あとがき）進められている。要するに、転換期における傭兵制度をば、その社会経済的基盤の深みから、政治権力との関連において、把握されている。

更にこの研究で注目すべきは、その成果が個人の著作ではなく、多くの人々の共同研究からなつている点である。最近共同研究は社会科学の部面でも、此処彼処で随分流行している。勿論それは、比較的短期間に綜合的成果をあげうる、絶好の方法ではあろう。然し乍ら往々にして、研究者の自主的立場が失われ、研究における立体的画像をえ難い嫌いがある。勿論、「共同研究としては、たんにテーマを共通にするだけで、研究者個人がバラバラに研究したのでは意味がない」（あとがき）であろう。ここに共同研究上に横たわる

アポリアがひそむ。然し乍らこの傭兵研究にあつては、「研究者個人の研究を中心としつつも、たえず共同に討論して有機的連関を保つという方法」（あとがき）をもつて、ユニークな研究方法を提示していられる。この点はこの書物のもつ大きい特徴であるといえよう。

研究はその目次を通覧して分るように、序論に始まる総計十一の論文をもつて、構成されている。序論は理論的な把握で、論文はドイツを主題とするもの三、イタリアのそれが同じく三、スウィス一、フランス一、イギリス一、アメリカ一、である。ドイツ、イタリアの諸国に主題の多くが割かれているのは、傭兵化なる現象がこれらの国に、より多くみられたことによるであろう。ともあれこれらの国が統一国家の形成に、著しい立遅れを示した点を考え合せる時、まことに興味深い。逆からみればこれは、絶対王政の成立が早熟的なるイギリス、フランスに、傭兵現象が相対的に稀薄であつたことを、示すものでもあろうか。ともあれ、夫々の国を特殊専門領域としている筆者達が、時期的にはほぼ、絶対王政成立期に焦点を合わせ、研究の共同を積んでいられる。次いでこれらの個々につき、紹介を進めよう。

先づ序論。副題として「傭兵制度の歴史的類型」とある。前川氏は執筆者を代表して、理論的概観を試みる。クラウゼヴィツの「戦争論」を引用しつつ、戦争と政治の深き関連を指摘する。「戦争は政治の一手段である」(p.3)なる提言がそれであり、政治体制の変貌の中に、傭兵制度の歴史過程を追及する。即ち、(A)傭兵化した封建軍隊、これは「封建軍隊の中での『傭兵ではないが金が支払われている補助軍』的存在」(p.5)。(B)傭兵軍団、「国内各地に散在し、もつぱら金銭の獲得を目的として、求めに応じて軍団として有力諸侯に傭われて出陣する」(p.6)。(C)傭兵的常備軍、これは「傭兵軍団をばいわば常備軍化することであり」(p.7)、「国王の軍隊」ではあつても、「国民の軍隊」ではない。この意味で市民革命後の「国民的常備軍」とは一線を劃した存在である。この前川氏の理論的考察は、簡にして要をえており、これに続く各論文の、大前提たる役割を果している。

次いで鯖田豊之「十四世紀の盗賊騎士団について」。この論文はその根幹をなす論理的展開、並びに実証的史料操作において、質量共に本書中の白眉といつてよいであろう。副題に「ラントフリーデ運動を通じて」とあり、最近喧伝されている堀米庸三教授、Joachim Gernhuber の成果に立脚し、そこから問題を展開する所謂 Handfriede 運動がそれであり、盗賊騎士団をこれと関連せしめつつ、「中世的秩序から近代的秩序への転換」(p.17)を読み取る。この観点の下に盗賊騎士団の活動、構成、成立、消滅が分析される。氏はその活動について、「掠奪、暴行、放火をことは否定しえないとしても、彼らは同時に、傭兵となることによつて彼らのより広い活動の場を見出していた」(pp. 31-2)とされる。しかもとして、野盗のごとき振舞をなしていたことその構成は、「封建的階層秩序を止揚した、いわば成員の平等を原則とする、同志的結合」(p.35)で、騎士身分の外に非騎士身分即ち、「一般の市民や農民をも、積極的な戦闘要素として、その中に抱き込んだ」(p.36)でいる。「民衆の動員」 die Aktivierung der Masse がこれに他ならない。それ故その成立は、騎士層の没落に伴う非騎士身分の向上なる契機が考えられねばならない。換言すれば、中世末期

テリトリウム国家発展の諸条件こそ、その成立の主要原因であろう。「テリトリウム成立期に、彼ら盗賊騎士団を傭兵として使用したのは、実はテリトリウム領主そのものであつたとの臆測を可能にし、逆に、彼ら盗賊騎士団の活動こそ、テリトリウムの発展を強化し、それがさらに彼ら自身の滅亡をもはやめたのではないか」(p.50)と氏はこの間の弁証法的発展をば、鋭く指摘している。いわば盗賊騎士団は、その浮動性の故に容易に動員可能で、ラント・フリーデを有効に実施せんとするテリトリウム領主にとつて、一面好ましい存在であつた。が然し他面、組織的軍事訓練の欠如は、新しき軍制の中核とは、到底なりえなかつた(p.70)。我々はここにテリトリウム国家形成における、彼等の否定的役割と、その悲劇的運命を学びえよう。

瀬原義生「農民戦争と傭兵」。ドイツ農民戦争につき、斬新な立場を表明していられる氏は、「シュワーベン同盟の場合」と副題して、テリトリウム体制下における傭兵事情と、その社会的役割を分析している。先づその同盟が、ドイツにおける萌芽的な近代的国家権力=領邦国家の利益擁護機関としての性格」(pp.86-7)を濃厚に帯びている点を指摘する。その限り同盟の徴募兵は、階級支配の道具としての役割を果す。同盟軍の指導者 Dr. Leonhard von Eck こそ、農民弾圧の指導者として、多くの傭兵就中、外国人傭兵を動員し(p.97)、「一揆鎮圧の最良の手段」(p.116)を見出していた。然し乍ら農民戦争に対抗する同盟軍の実情は、「つねに分裂の危機を内在していた」と見做す(p.97)。何故なら、「それは、おそらく同盟軍の大多数を占めたと思われる農民兵が、自己と同じ階級である蜂起農民に対していささかの敵愾心をも持たなかつた、持ちえなかつた」(p.98)からである。かくて氏は、シュワーベン同盟を通じ、階級史観に立脚して、絶対主義形成期の傭兵軍内部の実情と、その階級的役割を分析していられる。賢実な手堅い論考といえよう。

中村賢二郎「傭兵隊長ヴァレンシュタインと国家権力」。瀬原氏の傭兵軍内部の構造分析と異なり、専ら傭兵隊長の歴史的役割を、国家権力との関連において取扱つている。先づ傭兵隊長は本質的に、「戦争企業家」であり、一種の投機業者」である(p.121)。その前期的利潤析出の基盤は、軍隊給養のために課せられる臨時税であり、所謂、軍税 Kontribution がこれに他ならない。それ故「傭兵隊長は国家権力の側よりするならば、その拡張、擁護のための軍事力の提供者であるに対して、傭兵隊長は本来その雇傭者に対して何ら忠誠の観念を持たず、ただ軍事力を通じて出来る限りの利益を引き出そうとするに過ぎない。……彼は自己の利益のためとあらば、国家権力自体をも侵害する可能性を持つのである」(p.142)。ここに中村氏は、傭兵隊長ヴァレンシュタイン自身にひそむ自己否定の契機を見出し、その没落の萌芽を摘出する。しかも歴史は「皮肉にも、彼の創始になるとの意義すらもつ軍税制度が、やがて皇帝軍維持の可能性を与えることにより、彼の謀反の失敗に一半の条件も供している」(p.157)と。傭兵隊長は歴史的展開の虜となつて、自らの没落を招来する。軍税制度の歴史的役割を問われるあたり中村氏の論理は透徹した鋭さを持ち、傭兵隊長のディアレクティッシュな姿態は、剰す所なく追究されている。蓋し秀作といえよう。

富岡次郎「フィレンツェにおける民兵制度の崩壊と傭兵の使用」。これを含めて以下の

三論文は、舞台を南欧イタリアに移す。富岡氏の扱う主題は傭兵制度の成立過程で、これを経済社会の動きの中で把えている。即ち、フィレンツェにおける自由な自治都市の建設が、やがてPopolo Grasso（大市民）とPopolo minuto（小市民）に階層分化する(p.166)。やがて「富裕な市民は軍役奉仕に従事する代りに金を市政府に提供し」(p.172)、兵役を免れる。地方小市民は、大市民の為のみの戦争遂行には反対であつた。軍役忌避がみられる所以である(p.166)。今や市民々兵制度は崩れ、大市民の手になる傭兵制度が登場する。こうした都市国家内部の寡頭専制政の裏に、前期的商業資本の独占化が進行したのであり、軍制の変化はこの反映に他ならない。

会田雄次「フィレンツュ傭兵制と商人政権」。本論文は時期的には、富岡氏の前掲論文に続くものであるが、内容的には、中村氏の問題意識に近い。氏の目的は、「権力の上からのよびかけと、社会の下からの応答とが歴史の流れの中で如何にからみあいつつ傭兵制度を展開させて行つたかを具体的様相において闡明すること」(p.199)である。分析の場を都市国家フィレンツェに求め、何故にこの都市のみが、傭兵隊長の下剋上をみなかつたかを問われる。そこでは共和政から寡頭専制政への移行と共に、Plebejerstadt（賤民都市）の性格を帯びつつも、通念に反して、傭兵による国家覆滅の企てをみなかつたのは何故であろうか？この設問をめぐり色々な解釈が可能であろう。就中有力なのは、優秀な支配者の個性にその要因を求める仕方であろう。「しかし問題は個性に帰着せしめる以前の段階において、なぜに個性の活躍が可能であり且つ成功したかというより普遍的な前提を設定し得るか否かにある」(p.236)とされる。かくて氏は古い政治史的叙述との絶縁を強調しつつ、比較史的視野を導入して、分析的解明に入る。畢竟、武士に対する市民の優越が、末端民衆を常に把握していたゆえに、傭兵隊長に叛乱の余地を与えなかつたと断定する(p.236)。「支配者の民衆把握程度如何が傭兵叛乱の契機ならびに成否を決定するキーポイント」(p.238)であると、本論文は量質共に、本書の重心を形作つており、正にそのピークである。比較史的視野の下に、立体的、多角的な設問方法をとつての分析、そのスケールはまことに雄大である。

永井三明「十五世紀イタリア社会と傭兵制度の展開」。これは視野を全イタリアに拡大。先づマキアヴェルリ神話―傭兵軍依存を国家没落の主要原因とみる―を打破、移動的傭兵の常備軍傭兵化への移行を指摘する(p.230)。これも生産過剰に伴う国内市場の獲得闘争に由来すると見做し、サポーリの「十五世紀衰退説」を退け、傭兵制変質の理由を、社会経済的基礎に求められる。しかも更に、これをば北部と南部という地域差として示され、イタリア全土における多彩なあり方を提示する。堅実な論究というべきであろう。

越智武臣『『インデンチュア』制度について』。眼を「イギリス傭兵制の一形態」に向けよう。封建末期の政治情勢の中で、従来の封建的軍役制度に代る募集方法として登場。その本質をば、(1)主従関係が金銭を媒介とした双務的なもの、(2)契約が長たる一人の契約主体を通じて諸侯あるいは国王となされたもの、(3)大抵の場合、契約主体が下級封建身分たること、の三点に集約される(p.380)。かくて下級騎士、逃散農民の傭兵化を分析し、危機下の領主の姿態をば、流麗な筆致で画かれる。兎もすれば経済史的理解のみに躊躇し勝

ちな学界に、新鮮なる視角を与えられたといえよう。

川口博「百年戦争期フランスにおける傭兵の問題」。鯖田氏のテーマと類似した性格のもので、傭兵野武士団の歴史的役割を扱ったもの。野武士団は、封建的軍事制度の補強として登場しつつも(p.391)、この買収と内部分裂を利用した国王によつて否定せしめられ(p.410)、勅令騎士団」(Compagnies d'ordonnance)にその席を譲る。傭兵野武士団のもつ経過的な運命を、手際よく纒めていられる。

瀬原義生「スウィス傭兵の成立」。ヨーロッパ近代国家の形成期—ブルゴーニュ戦争、イタリア戦争、フランス絶対主義—を、詳細に分析しつつ、傭兵雇主側の国際情勢を論究、これと対応的に雇、われるスウィス傭兵の実情を摘出。傭兵における農民兵の重き比重を重視し(p.53)、これがスウィス側封建的危機の表白に他ならない点を抉出する。

今津晃「アメリカ革命戦争とドイツ人傭兵」。先づ今津氏は、ドイツ人傭兵使用が、独立論を刺戟した米国側の事情と、他方、劣弱ドイツ兵雇傭を断行した英本国内部の政情を分析する。これに続き山本氏は、革命戦争における軍事史の概略を述べる。かくして英国が窮余の策として採用したドイツ人傭兵は「一方で戦闘力供給の側面から、他方……反英国感情の醸成という側面から、『革命』の収拾をかえつて『独立』達成の方向にときはなつてゆく一つの契機を提供していつた」(p.526)と。論旨明瞭であるが、敢えて蜀望の念を抱くならば、傭兵問題を中心に据え、論文を立体的に構成して欲しかつた。

以上十一論文に亙つて、未熟をも省みず無雑な紹介の筆をとつてみた。勿論その批判は他日を期さねばならぬ。何故なら元来批判は、原書、原史料に関する充分な知識と、且つそれを貫く史観を持して、始めて可能であろうから、寧ろ私は、泰西の研究においても稀なこの分野の分析を、一書に纒め上げられた共同の成果に、満腔の敬意を表したい。とりわけ政治過程と社会経済過程との綜合という形で、傭兵研究に新たなる道標を示されたことは、大いなる成果といわねばならない。兎も角本書は、独り西洋史学徒のみでなく、広く歴史科学を学ぶ者の良き伴侶である。とりわけ現下日本の直面する再軍備論を前にして、傭兵制度の辿つた悲劇的運命は、充分省察を要するであろう。本書の一読を御契めする次第である。(昭和三十年三月三十一日発行　比叡書房刊、五二八頁、定価八〇〇円)

——田中　裕——

Chung-li Chang,
The Chinese Gentry
Studies on Their Role in
Nineteens-Century Chinese Society
(*University of Washington Press, 1955*)

一

本書は、ワシントン大学極東・ロシア研究所で行われている中国近代史研究プロジェクトの一業績である。著者はこのプロジェクトのスタッフであるが、序文によれば、数名のスタッフの共同研究の成果が盛りこまれているようである。このプロジェクトの目的は、伝統的中国社会の分析、および近代において西欧とソヴェト・コミュニズムの圧迫がもたらした中国社会の変化の究明にあるようである。本書は十九世紀に重点がおかれ、西欧勢力の圧迫の下に、中国社会がどのような変化